

自由研究発表

スラウェシ周辺海域におけるシマダコ (*Octopus cyanea*) 漁をめぐる技術と流通
Technology and Distribution of *Octopus cyanea* Fishery in Sulawesi

中野 真備 (人間文化研究機構・東洋大学)

NAKANO Makibi (National Institute of Humanities・Research Center of Toyo
University)

中スラウェシ州バンガイ諸島のサマ／バジャウ人 (以下、サマ人) 集落 A 村では、2010 年前後より擬似餌を用いたシマダコ漁が本格化し、今日では若年層を中心に人気の高い漁法のひとつとなっている。スラウェシ周辺でみられるタコ漁具には、チポ (*cipo*)、ママンニス (*mamanis*) (いずれもバンガイ諸島など)、カドヤ (*kadoya*) (トリトリ周辺)、水中銃や銛 (トリトリ周辺) などがある。擬似餌チポはオセアニアにみられるネズミを模した擬似餌に類似するが、スラウェシ周辺のはエビやタコを模している。

かつてサマ人といえばナマコやフカヒレ、ハタ類などの高級海産物が主な漁獲対象であり、彼らの生業・生活にとっても東南アジア海域世界においても、これらは重要な位置を占めてきた。しかしながら、海産物価格の変動や、資源そのものの枯渇、スシ元海洋水産大臣の政策や違法漁業の取り締まり、さらに COVID-19 の影響による海外市場の輸入規制など、複数の要因が重なって高級海産物市場は大きな影響を受けた。一方、このような激動の時代で生き残った仲買人たちの一部は、シマダコ取引に参入していた。A 村を含む沿岸漁村の漁師たちは、元々シマダコをまったく釣らなかったわけではなかった。しかし国内外で需要が増したことから次第に価格がつき、タコ漁を専門とする漁師も増えてきたと考えられる。このような外部要因は漁法そのものにも変化を与えつつある。従来、ヨーロッパ市場向けのシマダコ輸出は、塩漬品か、鮮度が落ちて水で膨張した質の悪い商品が輸出されてきた。2010 年頃から日本を含めた各国がより新鮮かつ高品質な商品を求めるようになると、生産地からの輸送距離と製氷施設が鮮度を保つ大きな鍵となり、また漁法によっても差がつくようになる。品質を求める仲買人や企業は、水中銃や銛で傷のついたシマダコを買い取らず、擬似餌を用いた一本釣り漁を推奨している。

本発表では、高級海産物取引に変化が訪れている今日、インドネシア東部島嶼部海域におけるシマダコ (*Octopus cyanea*, G) 漁を切り口とすることで、ローカルな技術の変化や販売・流通、グローバル市場への展開を見通すための予備的考察を試みる。